報告

佐伯史談会初歩き
～佐伯独歩会と共に～

平成二十七年度の初歩きは一月九日（金）に実施された。今年の目的地は、国木田独歩の小説「源おじ」の背景となっている「葛港」の海辺へ出る道の沿線である。独歩はこの道を殆ど残さず歩き廻っている。

十二月一日の日記に、「二十九日の薄暮、一人櫨の道を散歩せり。天雲リテ晩鐘雲にこたへ、村暗うして燈未だ点せず、寂寞と人声とは吾をして感慨に堪へざらしめぬ。家を出て左に折れ、養賢寺の門前を過ぎて直に野分けに進む一路、右に溝あり左は水田なり。この一路達して窮まる処は家数も十四五に満たぬ。蟹田と申す字、まだ其の家々に及ばぬ処、一座の森左に在りて裡に社あり、前に石の鳥居あり、石灯籠あり、大いなる石橋溝にかかり、溝はこの辺に居たりて甚だ広く水をたたへ、潮満つる時は小さき湖を形づくる。」とある。

この社を五所明神社という。

一、五所明神社

五所明神社にてお祓いをうける初歩きの面々

五所明神社は、佐伯市臼坪にある神社で、大同元年（八〇六）の創祀と伝えられる。奈良の春日大社・京都の日本最古の酒造の神梅宮社、大阪の住吉大社、京都の加茂神社、京都の伏見稲荷神社の五社を合祀している。

慶長十一年（一六〇六）佐伯の鶴屋城の築城にあわせて五所明神祠宇を修造している。そしてこのお宮を佐伯城市の鬼門鎮護とし祈祷所として利用していた。佐伯藩には他に若宮八幡、龍護寺観音、養賢寺大日寺等の名前が佐伯藩御用日記等に記載されている。現在は佐伯市民の宗社である。

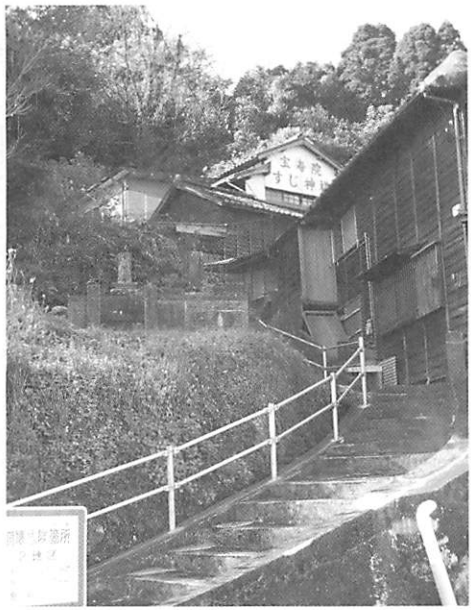
次に私たちが訪問したのは、平野地区にある「すじ神様」である。

二、すじ神様

（宝珠院・佐伯四国八十八ケ所二番札所）

このすじ神様は鶴谷城建設に関わりがある。

慶長七年（一六〇二）毛利高政が鶴屋築城を計画し標高一四〇ｍ余の山上に城を築く。市田五郎左衛門祐定に縄張りを取らせ、伊豫宇和島の人「宝寿」を土木工事の担当者として任命した。慶長九年（一六〇四）領民夫役の人海戦術により城が竣工した。宝寿は暇を請うが許されず養賢寺境内に一庵をつくり暮らす。慶安五年（一六五二）庵にて逝去。宝寿（宝珠院）は「故郷の宇和島の見える場所に、わが骨を埋めて欲しい」と遺言し、その遺言により、毛利家の別荘跡松関の丘（松ケ鼻）にあった養賢寺の末庵三光庵の境内に葬られた。



しかし、三光庵にお参りにくる人から「庵の入り口にお墓があるのは…。」との話がで、北方の山麓に宝珠院（宝珠院廟）として移された。遺骨はそのままであったという。大正五年（一九一五）、日豊線佐伯以南敷設工事の際、遺骨埋めていた場所が壊されその祟りで工事請負人の妻女が高熱を発し発作に苦しんだと言う。

その後宝珠院の遺骨を清め、新たに宝珠院の墓地と呼ばれる場所に埋葬すると請負人の妻女の病気も平癒したという。この宝珠院の墓は虐（おこり）を病む者が祈れば効験があるとされ筋神様と呼ばれ参詣人も多い。

「若き日の国木田独歩」（小野茂樹著）には、この頃の佐伯の姿をこう記している。

「その頃の佐伯の葛方面へ行く道は今とは大変違っていた。現中村区（城下東・南・北町・常磐町）あたりから先は人家が無く、みな田畑、常磐橋もなかった。蟹田には塩浜（今の駅前から海岸一帯塩田であった。塩浜と呼んでいた）と二、三の人家位しか無く、葛に行くには五所明神社前の小径を通り、今の駅の裏を通って、つまり松関から一本杉、弁慶石を経ていったものである。『湊道と櫨の堤との間の一村』は松関の下、松が鼻のことか」と。この松関に宝珠院があった。

現在、平野区の山の上に宝珠院（すじ神様）は鎮座している。御本尊は観世音菩薩である。

三、妙見社（妙見産霊大社・妙見神祠）

「若き日の国木田独歩」の七月十二日の日記に「湊道を辿って葛港へ、この港の北側に聳える小丘の上にまで、独歩の足はその細道を踏んで登っていく。道が二つに分かれ、一は左手の妙見社（処女作『源おじ』にでている社）のある丘の方へ、一は右手「暦報竿の小丘」（暴風暦報の信号標が頂上にたてられている）へと導く。共に前方の大入島や周辺の海辺地を見下す景勝の丘である。……妙見の社に至る。此の社は海に突き出せる小丘の上にありて樹木茂り海風梢に鳴り、波濤の響き麓に聞こえ寂寥たる物色、己に吾と弟とをして、これより以前、しばしば来る毎に楽しみて逍遙せしめたる地なり。」とある。

妙見社は、佐伯市坂の浦嵐崎の山上に鎮座している。今から千餘年前の安和元年（９６８）に、大入島石間浦の沖合に北斗権現（妙見菩薩）が示現したと言う。浦人が守後浦に勧請したが、寛弘五年（一〇〇八）神託により嵐崎（坂

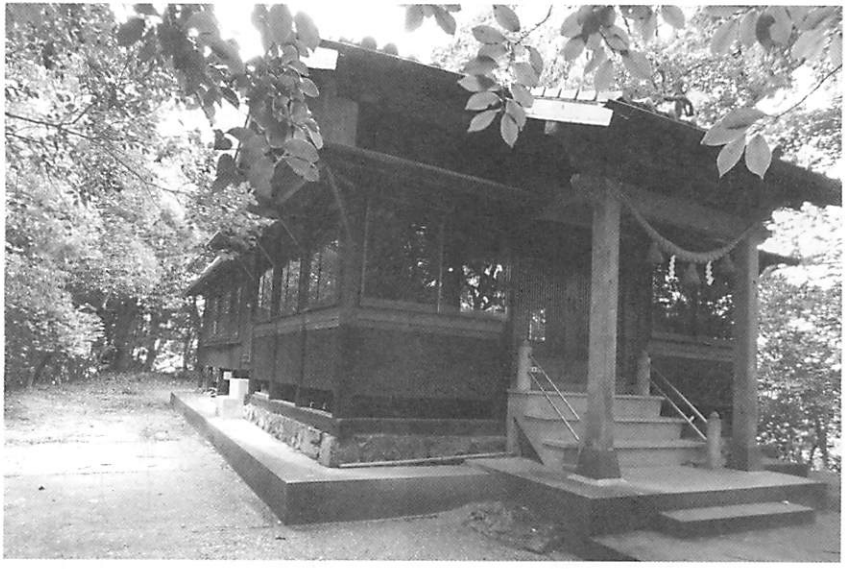
の浦）に移された。宝永五年（一七〇八）六代藩主毛利高慶が佐伯城市の鬼門鎮護の神として、海抜二十八・五米の坂の浦山上に移転した。

妙見社の鳥居には、文政十三年（一八三〇）庚寅年十一月吉日の文字が見える。拝殿前には左右に高さ一米弱の「奉獻御神燈、文政十丁亥年三月」と書かれた石碑がある。

また、本殿前には深さ一〇センチメートル程の火を燃やすためのサークルがある。神殿内には矢筈の紋が染められた幔幕が奉納されている。妙見社への道は田ノ浦恵比寿神社の横からと、本田造船の工場内より登る事ができる。恵比寿神社右横には平成塔「国木田独歩寄寓」の碑が建てられている。

この地は、国木田独歩が下宿先であった坂本邸（現国木田独歩館）を出て、佐伯を去る前の一ヶ月間を過ごした所である。当時は鎌田旅人宿と呼ばれ旅人宿兼蒸汽問屋であった。山側の二階の一間に弟収二と住んでいたという。今はその建物も残っていないが、恵比寿社の社からは葛の港が展望できる。

初歩きの最後は「源おじの像」訪問である。



坂の浦の妙見社社殿

国木田独歩が下宿した宿

四．港ロマンパーク「源おじと紀州像」

佐伯フェリー乗り場前の「港ロマンパーク」と呼ばれる公園の一角に国木田独歩の作品「源おじ」の主人公、源おじと紀州の像がある。国木田独歩の作品「源おじ」は一八九七（明治三〇年）に発表された作品である。港の一角に住み船を漕ぐことしか知らない源おじと若い娘の物語、源おじと乞食紀州との出会い、乞食紀州を引き取る源おじ等々、港町の一角を舞台に描かれた人情味溢れた物語である。是非一読を。

源おじと紀州像